

はじめに

高橋秀寿

連続講座『西川長夫——業績とその批判的検討』の第三回目のテーマは、まさに国境をこえた西川長夫氏の国民国家論が韓国でどのように受容され、どのような反応を引き起こしたのか、それはどのような背景をもち、韓国の学会と社会にとって何を意味するのかという問題を考察し、そのことを通して西川氏が提起した問題の意味を再確認・再検討することになりました。そしてそのテーマにとってもっとも適任であると思える報告者を韓国からお迎えすることができました。延世（ヨンセ）大学の金杭（キム・ハン）氏です。金氏は日本の東京大学で日本現代思想史の研究によって博士号を取得したのちに、その博士論文にもとづいて『帝国日本の闕——生と死のはざまに見る』を2010年に岩波書店より上梓しています。2011年にソウルで西川氏を囲んだ座談会が開かれ、その記録はハンゲルで刊行されましたが、金氏はこの企画にインタビュー兼通訳としてかかわっています。この座談会は日本語に翻訳されて、本誌に掲載されています¹⁾が、そこからは金氏が日本現代思想研究の脈絡のなかで西川氏の研究を深く読み解き、それゆえに当時刊行されたばかりの『パリ五月革命私論』やそれまでの西川氏の研究に関して鋭い質問を展開することで、西川氏から興味深い発言を引き出すことに成功しています。その彼が韓国における西川氏の国民国家論の受容とその背景と意味を語ってくれるという機会を私たちは幸運にももつことができました。さらに、韓国出身で、立命館大学と同志社大学を基盤にして日韓の様々な問題を歴史的に研究している沈熙燦氏と、立命館大学先端総合学術研究科において西川氏のもとで朝鮮文学を研究していた原佑介氏にコメンテーターを務めていただき、有意義な議論を展開することができました。以下の三人の論文は、そのときの議論にもとづき、その成果を踏まえて執筆されています。

原佑介氏が指摘しているように、最後の論集となった『植民地主義の時代を生きて』にある西川長夫氏の著作目録を見ると、かつては西洋に関する研究が目につくのに対して、晩期になるにしたがって韓国に関する題目が増えており、このことは「[「原点」,「原風景」と呼ばれた旧植民地への複雑な回帰の道のり」を彼が歩んだことを示唆していると言えます。しかしまた、彼の著作が2000年代に『国民国家論の射程』（2002年）や『国境の越え方』（2006年）、『<新>植民地主義論』（2009年）、『地球時代の民族・文化理論』（2009年）というように次々とハンゲル語に訳されることで、西川氏が韓国でも読者を獲得し、韓国の研究者との交流を広げていったことも、彼の過去の記憶を掘り起こし、現在の韓国に関する関心を呼び覚ましていったといえましょう。このことは、本誌に翻訳された座談会での発言からもうかがい知ることができます。さらにこの時期は、西川氏の国民国家論が<新>植民地主義論を通して深化を遂げていった時期とも重なっています。西川氏の著作が韓国で受容されていくと同時に、植民地支配を行った

集団の一員として朝鮮に故郷をもっているという西川氏の「原点」に内包していた植民地主義が新たな境地を切り開いていくというこの二つの現象は単なる偶然の一致ではないでしょう。そこには相乗効果というべきものが介在していたように思えてなりません。

金杭氏は韓国における「西川受容」の背景をいくつか挙げています。そのなかには冷戦以後の政治・経済状況という日本と共通する要因が見受けられますが、植民地化という歴史的経験にもとづく日韓の相違に関わる要因も指摘されています。つまり、植民地化の歴史を忘却し、あるいは反省や倍賞の問題に還元してしまおうとする日本の知的風土のなかで生み出された西川国民国家論は、植民地時代の歴史的記憶が国民的アイデンティティと深くかかわっている韓国においては、その反応と受容において大きく異なる意味内容を包含せざるを得ないということです。具体的に言いますと、西川国民国家論は、日本では戦後の国民国家をグローバリゼーションのなかで相対化していく試みとして受け取られがちであったのに対して、韓国では植民地化の主体としての帝国と国民国家の同質性や、歴史における両者の共犯関係などの論点が強調されることで、彼の国民国家論は反日本帝国の立場によって刻印された韓国の国民意識やナショナリズムに対する極めて辛辣な批判理論として受け取られ、またそれゆえに激しい批判を浴びることになりました。そして、このような批判理論を受け入れる知的風土なかで培われていった韓国知識人は、いまや金杭氏のような日本帝国に対する鋭い歴史解釈を展開しているだけでなく、朴裕河氏の『帝国の慰安婦』（2014年）や金哲氏の『抵抗と絶望』（2015年）のように、帝国と国民国家の関係を批判的にとらえることで、韓国の国民的アイデンティティの根幹を激しく突き、それゆえに韓国内ですさまじい反発を呼び起こすような研究を生み出しているのです。

こうして、西川氏の国民国家論の韓国における受容と、おそらくはそれに触発されたであろう彼の新植民地主義論の展開という知的な交流は、今度は国境のこちら側に生きる私たちに辛辣な問いを投げかけることになりました。私はその迫力に押し倒されそうになりますが、連続講座第三回とその記録がこの問いに真正面から真摯に向き合うきっかけとなることを願わずにはいられません。

注

- 1) この座談会記事を金杭氏が論文で引用しているが、それは金氏本人が日本語に翻訳したものであり、原佑介氏によって翻訳された本誌掲載の記事とは訳語が異なっていることをあらかじめお断りしておく。